

OA化は一石二鳥

編集理事 村野和雄



英文論文誌が4分冊として発行されてから一年余りがたちましたが、内容、体裁ともに評判が高く、順調なすべりだしをみせていることは大変慶ばしいことと思います。英文論文誌の編集がボランティア精神による自主運用を前提としていることから、タイムリーな特集号を企画し質の高い論文を募って論文誌としての高レベルを維持するための編集委員長、編集幹事をはじめ編集委員各位の御努力は並大抵のことではないと思います。

編集に携わる者にとって最近では強力な助っ人が現れてきました。それは電子メールやデータベースなど進展が著しいOAツールで、これらの適用によって作業の大幅な効率化が可能となり、ボランティア運営を長期的に維持できる見通しが明るくなってきたように思います。特に、電子メールは編集委員の間の連絡を非常に容易にし、会合の回数を減らすなどその効果は絶大のようです。

電子メールの効用は、送り手から見ると電話と異なって相手が在席かどうか心配をせずにメッセージを送れるという利点があり、受け手からすると自分の都合のよい時間にメッセージを受信し、これに対して返信、転送、記録などの処理を思うままにできる、という利点があります。もちろん、実時間通信ではないので、情報のやりとりのサイクルには通常一日程度かかりますが、これが問題となるほどの緊急連絡はほんの一部でしょう。将来は編集関係に留まらず、会員間の連絡、学会情報の通知、論文の投稿・閲覧など応用はどんどん拡大していくことでしょう。こうしてみると電子メールは新しい通信の世界を開きつつあるように見え、ファクシミリに次ぐ大型の新メディアの誕生かと期待がもてます。

電子メールの例でもわかるように、OAツールは最新の電子・情報・通信技術の集積であり、まさに本学会が推進する学問の発展の成果として生まれてくるといっても過言ではないと思います。しかし「紺屋の白袴」の言葉のとおり、関連分野の研究開発に従事する技術者の中でもまだまだOAの効果を十分に享受しているとはいえないのが現実ではないでしょうか。今、技術研究がニーズ指向型からニーズ指向型への比重シフトが求められている時代に、これを実現する最もてっとり早い方法は研究者自らがユーザとなり、ニーズにもっと敏感になることではないでしょうか。そういう意味から学会の各種オペレーションのOA化を推進することは一石二鳥の効果があると思うのです。

研究者自ら最新技術のユーザとなり、業務の効率化を進めると共に、次の技術開発の方向のヒントをつかむ拠り所にするという心構えが大切のように思います。